

江戸大絵図に見る 深川地域



天和4年(1684) 新改御江戸大〔絵図〕 部分
(国立国会図書館デジタルコレクション)

木場(のち「元木場」)

富岡八幡宮

下町文化



KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.

284

2019.1.18

発行

江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

○江戸大絵図に見る深川地域
大江戸のなかの深川

○江戸の町内探訪②
冬木町

○深川江戸資料館企画展
「杉浦日向子の視点
～江戸へようこそ～」

○江東歴史紀行
化学肥料の登場と鈴鹿商店

○村林家と小林猶治郎

○伊能忠敬が眺めた深川八幡祭り

○文化財豆知識11
江東区内の道標2

大江戸のなかの深川

上の図は、江戸城を中心に江戸全体を描いた江戸大絵図です。描かれたのは天和4年(1684)で、中央の「御城内」は江戸城本丸、「西御丸」は西の丸です。本丸は將軍居住地で政治の中枢、西の丸は將軍の跡継ぎや隠居した先代の將軍(大御所)が居住しました。その江戸城から東に日本橋、隅田川を隔てたところに深川が描かれています(絵図右端の○部分)。距離にして佐賀町までおよそ3kmほどです。深川が江戸の一部に組み込まれるのは、正徳3年(1713)ですので、厳密にはまだ江戸ではありません。

細かい部分に目を向けると、○部分の中央部左側には寛永18年(1641)から続く木場(のち「元木場」)・佐賀・福住・深川1付近)の堀割が描かれています。この木場は、元禄14年(1701)に新たな場所に移転(都立木場公園周辺、○部分)しますが、そこは1700年頃まで海でした。その西隣には、富岡八幡宮が描かれています。

「永代嶋」にある八幡宮までが陸地で、その東側は海。そこを東へと埋め立て、十五万坪(木場)、十萬坪・六萬坪などの新開地が成立しました。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

「冬木町」
ふゆきちょう

今回は冬木町を取り上げます。冬木町は、材木商冬木屋の屋号から付けられた町名との由緒をもちます。同家との関わりでは、深川七福神のひとつで、もとは冬木家邸内祠の冬木弁財天（冬木22-31）が残されており、いまでも参拝者が絶えません。

ここでは、文政11年（1828）に江戸の町名主が書上げ、幕府が編纂した『町方書上』（以下、書上）を中心に冬木町と冬木家について、見ていきたいと思えます。

冬木町の成り立ち

まず、冬木町がどのような経緯で現在地に成立したのか、その経緯を書上から見ることにします。

それによると冬木町は、海辺新田と永代新田の内にあった戸田土佐守の抱地を、宝永（1704）の頃に冬木屋弥平次と上田屋重兵衛が購入したことに始まったようです。その後、この辺りが木場（のち「元木場」。佐賀・福住・深川1付近、本紙281号参照）の内にあたることから、木置場として買受、入堀や地形などを多分の費用をかけて造成したようですが、元禄15年（1702）に御用地に召し上げられ

（実際は元禄12年）、その代わりに洲崎波除際と深川築地島崎町（平野4）の2ヶ所を下されました。

しかし、いずれの場所も木置場には不便なため、洲崎の土地の一部（1916坪余）を幕府へ上納し、「只今の冬木町」（現冬木の場所）に移りました。その際に年貢を免除すること、江戸の町同様に「家作御免」（自由に家を建てられる）の町屋舗とすること、さらに冬木屋弥平次の家名をとって冬木町とすることを代官伊奈半左衛門に願ひ上げ認められたと記されています。



本所深川絵図(部分) 幕末の深川の様子
(国立国会図書館デジタルコレクション)

この冬木町の場所は、時期を同じくして新たに開削された海辺橋以東の仙台堀に面しており、材木を扱う同家にとって、都合のよい場所であったことは間違いないと思われまます。

冬木家について

次に、冬木町の名のもとになった冬木屋とは、いかなる家なのか書上から見ることにします。

同家の先祖は上州（群馬県）碓井郡板鼻宿の農民角左衛門の子、五郎右衛門なる人物で、承応3年（1654）に江戸南茅場町（日本橋茅場町1-2）

に出店し、材木商売の店

をはじめたようです。その後、年代は不明ながら江戸城内の御普請の時、飛驒国（岐阜県）の材木伐り出し御用を勤め、4代目喜平次の時には、南新堀町（中央区新川1）へ転居しました。

時代は下って、寛政元年（1789）に6代目喜平次が病死すると、『町方書上』当時（文政11年）の当主でもある喜平次が跡を継ぎます。ところが、幼少のため後見人を付けると、「混雑」（もめごと）

が起り、訴訟沙汰にもなったようです。このころより、身上が「不如意」（経済的に困難な状態）になり、追々家屋敷も売り払って、冬木町に所持する土地に転居したと記されています。

冬木家を語り継ぐもの

材木商売で財をなした冬木家の繁栄を語り継ぐものには、国宝『紅白梅図屏風』で知られる江戸時代中期の絵師尾形光琳が、冬木屋の夫人のために描いたと伝えられる「白綾地秋草模様描絵小袖」（国重要文化財、通称「冬木小袖」）があります（東京国立博物館蔵）。

また、明治の「浮世絵師」といわれた小林清親は、明治17年（1884）「武蔵百景之内 深川ふゆき弁天」と題する錦絵で、冬の深川を情緒豊かに描いています。絵に描き込まれた建物は、冬木家の一部でしょうか。詳細は不明ですが、何とも趣が感じられ、当時の様子が偲べれます。



武蔵百景之内 深川ふゆき弁天
(国立国会図書館デジタルコレクション)

「杉浦日向子の視点く江戸へようこそく」

会期 平成30年11月13日(火)～11月10日(日)

深川江戸資料館の展示室は、江戸時代天保年間(1830～1844)の深川佐賀町の町並みや庶民の生活が再現展示されています。訪れる方の中には、杉浦さんの作品で江戸時代の風俗や出来事に興味を持ち、来館したという方も少なくありません。

杉浦日向子は、江戸風俗研究家や漫画家、文筆家などと様々な肩書を持ち、NHKで放送されていた「コメディーお江戸でござる」でもお馴染みです。本展示は、出版された多くの書籍や映画化された作品などを通し、江戸の研究や江戸への思いを彼女自身の言葉で紹介します。

杉浦日向子が捉える江戸

「江戸」とは、江戸時代と呼ばれる260年間の徳川政権下の日本ではなく、「江戸時代の江戸という名の都市に起こったさまざまな現象」といい、それは「おおむね18世紀以降、浅間山の大噴火、天明のききん、田沼ワイロ政治とかのころから幕末・明治までの期間」としています。とりわけ、8代将軍吉宗から11代将軍家斉の時代まで

が、江戸の町が充実していておもしろく、この時期に歌舞伎や相撲、戯作、浮世絵、落語、歌舞音曲、川柳などの文化が生まれ、現在まで続いており、自分の生きた時代と地続きの物として捉えていました。

生い立ち

昭和33年(1958)11月30日生まれで、本名は鈴木順子。兄は写真家の鈴木雅也です。ご存命であれば、昨年の誕生日で還暦を迎えていました。

幼少期より歌舞伎や寄席、相撲などを観ていたことなどが、のちの仕事に連なることとなります。大学中退後に稲垣史生の時代考証教室に通いはじめ、稲垣の内弟子のような形になります。しかし、時代考証で15年は食えない、と言われ漫画家へと方向転換しました。初めて雑誌に掲載された漫画は吉原を題材にした「通言室乃梅」です。その後、江戸に関する文章を発表しはじめます。初めての江戸に関するエッセイ集は『江戸へようこそ』(筑摩書房/1986)で、1980年代の江戸ブームもあり、江戸に関する

書籍を続々と発表しました。そして平成7年(1995)からNHK「コメディーお江戸でござる」の江戸風俗解説のコーナーを担当し、江戸風俗研究家としての名声を確立しました。

江戸学講座

杉浦さんは「江戸」について、次のような視点を持っています。

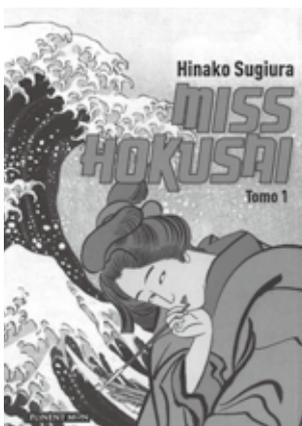
まず、江戸っ子について、その実態は意外と知られていないとしています。百万都市江戸の半分は武家と僧で、残り半分の町人の内、6割は地方出身者、3割が地元民とのハーフ、1割が地元民で、「江戸っ子」の条件である「下町育ち」は半数で、さらに3代続きとなるとその半数の12500。つまり正真正銘の「江戸っ子」は、江戸の人口のわずか1・25パーセントであったとしています。

また、江戸時代には歌舞伎、相撲、寄席など、現在にも続いている日本文化が生まれています。その特徴はいずれも庶民が生み出しているという点です。かつて、歌舞伎は吉原とともに「悪所」と呼ばれていました。それは、江戸の人びとの熱狂的なパワーがお上の手に負えない程だった為だといえます。現在の私たちには想像もできないくらいに物凄いものだったのです。

杉浦日向子が遺したもの

杉浦さんは、ときに「江戸からの旅人・タイムトラベラー」と評されることがあります。彼女が遺した作品は漫画や江戸について書かれた書籍の他にも、体験取材物や小説、装幀などがあり、漫画を含めた単著の数は30作以上、対談集などの共著は10作に及びます。

また、作品の映画化や翻訳出版など、海外でも人気を博します。葛飾北斎と娘のお栄たちの日常を描いた『百日紅』は、平成27年にアニメ作品として映画化。その後「Miss HOKUSAI」のタイトルで海外でも上映され、フランスの第39回アヌシー国際アニメーション映画祭で長編部門審査員賞の他、多数の賞を受賞しています。フランスでは他にも『二つ枕』が翻訳され出版されています。ポランドや中国、台湾、スペインなどでも杉浦作品が翻訳され、現在でも多くの人に「江戸」を伝えています。



スペインで刊行された『百日紅』

化学肥料の登場と 鈴鹿商店

肥料問屋を描いた絵葉書

左の絵葉書は深川区佐賀町にあった肥料輸入商の鈴鹿商店本店を描いたものです。鈴鹿商店が株式会社化したのは大正8年（1919）で、絵葉書の通信欄（1/3。大正7年までの型式）からみて、組織変更してまもなく発行されたものと思われます。



「株式会社鈴鹿商店本店全景」個人蔵

中央には油堀に架かる下之橋が見えます。鈴鹿商店は油堀をはさんで佐賀町1、2丁目に店舗と倉庫を構えていました。絵葉書は、肥料問屋と倉庫と堀割に囲まれた肥料の街としての佐賀町の雰囲気伝えてくれる1枚です。

肥料と深川

肥料は農業に欠かせないものです。同じ土地で作物の収穫を続けると、地力が衰えてしまいます。焼畑や輪作などは地力を維持するための先人の知恵ですが、人口の増大にともない意識的に肥料を施すようになります。日本では刈草などの自給肥料から、商品作物の生産が盛んになった江戸時代になると販売肥料である干鰯、魚粕、菜種油粕、下肥などが使われました。

深川には干鰯の売場がありました。元禄13年（1700）頃に銚子場（白河17付近）や干鰯元場（佐賀116、17、219付近）が、享保19年（1734）頃には江川場（深川111、216〜11付近）が設けられています。干鰯は主な産地である房総方面から舟運で運ばれたため、堀割の多い深川は適当な場所であったのでしょう。

化学肥料の登場

肥料商を干鰯屋と呼んだほど、干鰯は明治前半までは肥料商売の主流でした。その後、主役は鯨粕、豆粕と移り

変わりますが、昭和初年まではこれら自然由来の有機肥料が主に使われていました。

ところが、ヨーロッパでは1840年に植物が無機養分で育つという「無機栄養説」が提唱され、その後水耕栽培の手法が確立されて、有機肥料は土中の微生物により窒素・リン・カリウムなどの無機養分に変化して植物の根から吸収されることが証明されました。これにより無機物である化学肥料が登場することとなります。

日本での化学肥料の使用は、タカジアスターゼを発見したことで有名な高峰讓吉が、明治17年（1884）にリン酸肥料（過リン酸石灰）と原料であるリン鉱石を試験輸入したことに始まるとされています。高峰は渋沢栄一ら財界人に食糧問題における化学肥料の重要性を訴え、その熱意は明治20年の東京人造肥料株式会社創立に結実しました。工場は大島村釜屋裏（大島112）に建設されました。現在、釜屋堀公園内に「化学肥料創業記念碑」が建っています。

化学肥料開拓の先駆者

さて鈴鹿商店の創業者鈴鹿保家（1863〜1920）は、明治29年に日本で初めて硫酸アンモニアを輸入したことで知られています。硫酸（硫酸アン

モニア）は窒素肥料の一つです。

鈴鹿は元々は雑貨商でした。明治29年頃オーストラリア産品を扱う貿易商の兼松商店（神戸）の東京代理店になり、その後、兼松で輸入した動物質肥料の骨粉や乾血の東京方面での販売を委任されたことが、肥料と関わりを持つきっかけとなります。

肥料商への転身は、無謀な挑戦だと周囲には受け止められたようです。しかも魚粕や豆粕が主流の時代に、新肥料である骨粉などや化学肥料を販売するには大変な困難がありました。それでも鈴鹿は西ヶ原（北区）にあった農事試験場への依頼分析により新肥料の品質保証を得ながら、肥効を農家に伝えて普及に努め、あわせて農家の知識向上に貢献しました。商標の「牛印」は農家の忠僕であること、また馬印、鹿印は「馬鹿」と世間から呼ばれるほど家業に熱中する鈴鹿の姿勢を表しているといえます。

鈴鹿商店は、配合肥料や化成肥料の製造にも力を注ぎ、明治43年の農商務省の調査では、日本における主な肥料の製造、輸入業者に挙げられるほどになっています。

主要参考文献：『東京肥料史』、高橋周「新興肥料商の成長と貿易商」（『経営論集』1911）

（文化財主任専門員 栗原 修）

村林家と

小林猶治郎

江戸・東京を通じて倉庫業の拠点として位置付けられる隅田川東岸の佐賀・福住地域には、澁澤栄一など近代日本の経済界をリードした人物が数多く住んでいました。ここでは、その中から肥料商として名を馳せた村林家助と村林家とのつながりで芸術家としての道歩んだ小林猶治郎について紹介します。

まずは、村林家助の事績について、明治45年(1912)に編纂された須藤常『日本紳士名鑑』をもとに見ていきます。榮助は、弘化4年(1847)10月に三重県飯南郡松坂町字魚町(現三重県松阪市)の村林家助の長男として誕生しました。家は代々「魚商を以て業」としていましたが、明治4年(1871)、24歳の時に東京へ出て、深川区亀住町に居を構えていた同郷の豪商小津與右衛門の店に勤務します。小津家は海産物や肥料を取り扱っており、家業の魚商での経験もあいまって店の中でも重きを置くようになり、同8年には小津店の「総支配人」たる地位につきました。同14年、總支配人を退きますが、顧問とし

て小津與右衛門家を支えました。

明治32年、小津家から独立し、深川区小松町にて雑穀と肥料を取り扱う村林商店を立ち上げます。同35年5月1日付の東京朝日新聞では、日本人造肥料株式会社と特約店契約を結んだとの広告が掲載されています。この広告では、村林家助商店の住所は佐賀町2丁目9番地となり、商号のカゴメ(籠目)のマークも付されています。その後、同年に開業した倉庫銀行の監査役にも就任しています。この倉庫銀行は、深川区材木町の中村清蔵を頭取とし、本店を日本橋区蛸殻町とし、深川区堀川町に支店が置かれました。このように榮助は、小津家の店員から、肥料問屋として独立して、着実に深川の肥料商としての地位を確立していき

ました。一方、小林猶治郎は、明治30年3月に二代小林猶右衛門の長男として、静



ありし日の村林ビル正面のファサード

岡県興津町(現静岡県静岡市清水区)の別荘にて誕生しました。初代小林猶右衛門は、日本橋の木綿問屋小林吟右衛門(丁子屋吟右衛門、現チヨーギン)の丁稚となりますが、当主吟右衛門に見込まれ、番頭になるとともに小林家の婿として迎え入れられます。その後、分家して猶右衛門家を立ち上げ、繊維業に携わるとともに澁澤栄一らと東京証券取引所の設立に関わり、肝煎をとめました。二代猶右衛門は実業の世界ではなく、文芸の道をすすみ、宝井其角の流れをくむ俳人となり、螺舎一堂を名乗ります。猶右衛門の主宰する螺風会は、千人もの門人を抱えていました。亀戸の龍眼寺境内には猶右衛門(螺舎一堂)の句碑が立てられています(区登録有形文化財)。母ミツも秋光女という俳号をもつ俳人であり、猶治郎は、大商人であるとともに文芸の造詣の深い両親の影響を受けたことが想像されます。

ところが、父二代猶右衛門は猶治郎が6歳、母みつも11歳の時に病死します。三人の姉、一人の妹とともに幼子であったため、祖母が面倒をみることにになり、猶治郎の叔父小林一三郎が後見人となりました。この一三郎は、のちに村林家助の養子となり、二代村林家助となります。猶治郎は、明治44

年に本所高等小学校を卒業、慶應義塾普通部に入学するものの普通部2年を修了後に肺結核のため休学します。大正4年(1915)に慶應義塾商工学校に入学、同7年には慶應義塾大文学理財科予科に学ぶもののすぐに中退し、黒田清輝のもとで絵画の勉強をはじめます。この頃、後見人の二代榮助からのすすめもあり、村林商店の製肥部に入社しますが、長続きしなかったようです。その後の猶治郎は、平成2年(1990)に93歳でなくなるまで、多くの絵画を制作しました。

平成25年に練馬区立美術館で「超然孤独の風流遊戯 小林猶治郎展」が開催されますが、この時に猶治郎の孫で現代芸術家の富田有紀子さんの展示も行われました。有紀子さんは、関東大震災後に建てられた村林商店の事務所、村林ビルをアトリエとして使っていました。このビルの設計者は旧多摩聖蹟記念館などの作品で知られる関根要太郎で、ユージェントシユティールのデザインを取り込み、ビルの正面には村林家の商号カゴメがつけられています。このビルは平成30年に取り壊されましたが、肥料商村林家助と小林猶治郎の足跡は今後も語り継がれていくことでしょう。

(深川東京モダン館 副館長 龍澤潤)

伊能忠敬が眺めた深川八幡祭り

特別展「伊能忠敬と江東」の開催



伊能忠敬銅像 富岡八幡宮境内
忠敬をはじめ測量隊は毎回同社に参詣し測量の成功を祈った

昨年は伊能忠敬が亡くなって200年にあたる年。中川船番所資料館特別展として、伊能忠敬を取り上げました。忠敬は、佐原の商家の家督を子息に譲り、50歳から深川黒江町に住み、浅草天文方(司天台)に通って天体観測や測量術を学び、長い全国測量を経て、精度の高い日本地図『大日本沿海輿地全図』を完成させました。今回の展示は、全国測量の後に行われた江戸市中の地図、江戸府内図の下図を検討し、測量のため江東区内を歩き回り、中川番所付近で測量を終えたことを明らかにしました。

深川に住んでいた頃の忠敬の暮らしぶりを伝える記録は少ないのですが、文化4年(1807)8月に開催された富岡八幡宮祭礼の際に、大勢の見物人が押しかけて永代橋が落ち、多数の死者が出て大惨事になったという事件がありました。その時、伊能忠敬は深川にいたはず。資料を探ってみました。【資料1】「同日(十九日)産子の町々より踊り練物等を出す。江戸中はいふに及ばず近在より見物出て、昼四時壺巖島の出しぬり物、永代橋の束詰まで来りし時、橋上の往来駢闐群集の頃、真中より深川の方へよりたる所、三間計りを踏み崩したり。次第に崩れて跡より来るものをいかんともする事ならず、いやが上に重なりて落ちかゝり水に溺る。助かりしは稀にて、川下の水屑となりしは凡そ千五百人余といふ。」※「駢闐」集まって連なること

『武江年表』文化4年(1807)8月条(平凡社東洋文庫所収) 江戸の事件や火事、年中行事などの出来事をまとめた『武江年表』に記された富岡八幡宮祭礼での永代橋落橋事故のようです。この時の祭り開催は12年ぶり。江戸っ子が待ちに待った祭礼でした。しかし一橋家の船が橋の下を通るので、橋は通行止め。船が通る過ぎて通行解除となったことから、練り物や群衆が橋に押し寄せ、橋の中心から深川へ寄ったあたりが崩れ落ち一五〇〇人ものが川の中へ。大惨事でした。

祭礼の見物

忠敬には『忠敬先生日記』(伊能忠敬記念館所蔵 国宝)と呼ばれる克明に記録された日記が残されています。その一部が『江戸の伊能忠敬 伊能忠敬銅像建立報告書 保存版』(伊能忠敬研究会・日本ウォーキング協会編集発行、伊能忠敬銅像建立実行委員会頒布 2002年7月発行)に「伊能忠敬の江戸日記抄」として収められています。

【資料2】「十五日 晴天風 八幡祭礼 十九日に成る」

「十九日 晴天 朝五ツ後間五郎兵衛来る、四ツ前会田三左衛門来る、九ツ前高橋作左衛門並びに坂部貞兵衛親子来る、間・会田は五ツ半後に白木屋蔵店棧敷へ遣す、青木・下河辺・門倉なども同伴、九ツ頃より高橋氏我等同棧敷へ罷越、一番の練ものより七番迄一覽、八ツ半頃一同帰る、此午前往来過分に付、永代橋崩れて大勢のもの横

死に及べり」 『江戸日記』文化4年(1807)8月条 祭礼の日に、日頃の測量にかかわりのある人を招いて「白木屋蔵店棧敷」(傍線)で見物しています。大惨事については最後の部分でわずかに触れているにすぎませんが、確かに忠敬は大惨事の場面に遭遇していました。

日記に登場する人物は、「間五郎兵衛」は間重富(1756~1816)といい、大坂の富商であり大坂の暦学者。麻田剛立のもとで忠敬の天文学の師・高橋至時と同門でした。観測機器の改良も手がけ、至時とともに寛政の改暦にあたり、忠敬も重富から暦学を学びました。「会田三左衛門」は会田安明・算左衛門(1747~1817)のことで数学者。「高橋作左衛門」は忠敬の師・至時の長男、高橋景保。この時は幕府天文方で、のち忠敬没後『大日本沿海輿地全図』を完成させました。

「坂部貞兵衛親子」は幕府先手組同心で、測量の際は忠敬の片腕と言われた人、「青木(勝治郎)」は天文方下役で絵が上手な人、「下河辺」は先手組同心で地図製作に長け、「門倉」は忠敬の内弟子です。いずれも地図製作にたずさわっている人々であり、忠敬にとってはかけがえのない人々だったの

でしょう。

こうした測量隊を編成し、また地図製作に関わっていた人々が、「五ツ」(午前7時〜9時頃)、「四ツ」(午前9時〜11時頃)から昼近く(九ツ)にかけて集まり、「白木屋蔵店」の「棧敷」で祭礼の「練もの」を見物しました。では「白木屋蔵店」とは何でしょうか。白木屋は江戸初期に開業した老舗呉服店です(場所は現コレド日本橋)。日本橋の中心部にあった呉服店で、文化年間の頃には江戸を代表する名店の一つでした。

【資料3】「二十一日 晴天 此日道中長持其外書籍佐原積下し、隠宅へ置品を振分る、白木屋より反物取寄土産物を整える」

『江戸日記』文化3年(1806)11月条 祭礼が行われた前年の文化3年(1806)11月、忠敬は諸方への挨拶用に白木屋から反物を購入しています。おそらく大量に注文したのでしょう。そのことから、白木屋から見れば忠敬は「得意先」ということになり、白木屋の商品を格納していた「蔵店」に、特別の「棧敷」を設けて得意先を招いて祭礼見物してもらったのでしょう。では白木屋の蔵店とはどこにあったのでしょうか。

白木屋の蔵

【資料4】

仮證文之写

一札之事

一深川獵師町黒江町八幡通り南側二而北表田舎間拾四間吉尺五寸、東裏行拾九間三尺、西裏行拾八間、南拾式間三尺吉寸有之家屋敷、此度彦太郎方江讓申候処、相違無御座候

宝曆8年(1758)『深川屋敷書 替證文之写』(「白木屋文書」東京

大学経済学部蔵)

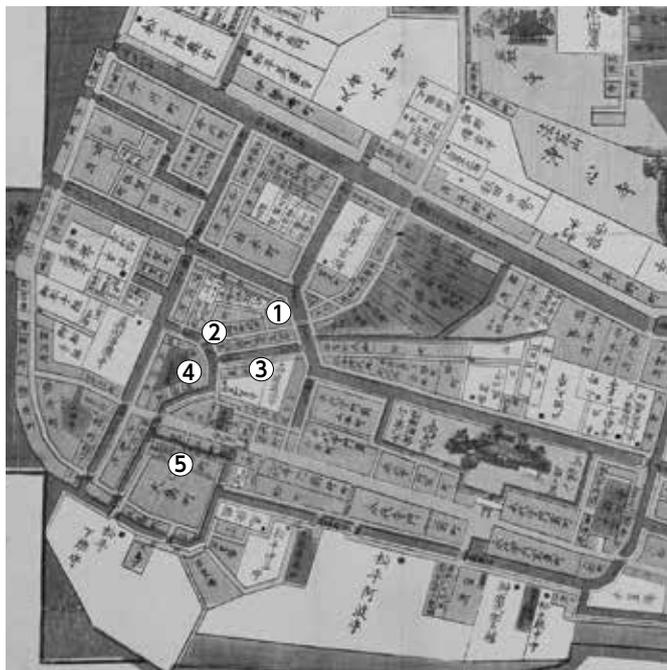
この資料は享保元年(1716)に取得した白木屋の深川蔵屋敷に関する書類を集めた、「証文の写し」の中に掲載されています。その内容はおよそ次のとおりです。

①白木屋(文書中の「彦太郎」が白木屋当主)は深川黒江町におよそ260坪ほどの屋敷地を持っていた。

②その場所は「八幡通り」、現在の永代通りの南側だった。ということになりました。ではその場所とはどこだったのでしょうか。

【資料5】(切絵図画像)

尾張屋板『本所深川絵図』では、深川黒江町は何ヶ所かに分



尾張屋板『本所深川絵図』文久2年(1862)

かれて存在しています。【資料5】では5ヶ所ほどに分かれ、そのうち、③が伊能忠敬が暮らしていた黒江町で、⑤が、「八幡通り南側」の白木屋蔵店があった黒江町になります。図中にも富岡八幡宮の「一ノ鳥居」が記され、そこから至近距離の場所に白木屋の蔵店があり、棧敷が設けられていました。現住所は門前仲町1-5、永代2-30付近で、門前仲町交差点から100メートルほど西寄りの永代通り沿いにあたります。表通りから少し奥に入ったところの忠敬の住まいから、現永代通りに出たすぐ先に白木屋の蔵があったことになりました。

深川で暮らしていた忠敬

50歳で家督を譲り、地球の大きさを知りたいという知的欲求から江戸に出て天体観測や測量術を学んだ伊能忠敬。そして全国を測量し、日本全国を作るという偉業に挑んだ忠敬は、残された膨大な測量の資料や日記からは、情熱にあふれ、目標に突き進むのと同じに、謹厳で慎重な人柄が垣間見えます。しかし富岡八幡宮祭礼での永代橋落橋を目撃していたのではないかと推測による資料の検証からは、測量スタッフや測量先、関係者への気遣いがうかがえます。もしも地方への測量の土産として白木屋の反物を持参すれば、江戸の老舗ブランドとして喜ばれたことでしょう。

佐原の豪商として、村役人として培った人格が、こうした気質となって現れたのでしょう。地図の制作には専門知識や技術だけでなく、多くの人との円滑な連携や心配りもまた必要な要件だったのではないでしょうか。深川に暮らした忠敬の息遣いを感じられるエピソードです。

(中川船番所資料館 久染健夫)

江東区内の道標2



以前、本誌281号にて江東区内にある「道標」について一部紹介しました。

道標とは、石柱に寺社など目的地へ
の方向、道のり、道の通称名などが刻
まれたものです。これらの道標は、街
道の交差点や分岐点、寺社の門前に建
てられました。

江東区では8件の道標を有形民俗文
化財（その内区の指定文化財は5件）
として指定・登録しています。

六阿弥陀信仰と道標

江戸時代中期以降、江戸市中や近郊
の寺社巡りは、庶民の日帰りの行楽と
して盛んになりました。これら観音霊
場・七福神巡りなどには順拝コースが
数多く設定されていました。

その中でも六阿弥陀参りは、特に人
気を集めた順拝コースです。六阿弥陀
参りは、奈良時代の高僧、行基に由来
する阿弥陀像六体を安置する寺院を巡
るものです。江戸の六阿弥陀参りは、
一番西福寺（北区豊島）、二番延命寺（足
立区江北・現恵明寺）、三番無量寺（北
区西ヶ原）、四番与楽寺（北区田端）、
五番常楽院（台東区・現在は調布市へ
移転）となっており、最後の六番が亀

戸常光寺（亀戸4丁目）です。

春秋彼岸の常光寺への参詣風景は、
天保期に刊行された『江戸名所図会』
で描かれており、そこには六阿弥陀へ
の参詣者が多くみられます（①）。



①春秋彼岸の亀戸常光寺六阿弥陀参詣
（『江戸名所図会』
国立国会図書館デジタルコレクション）

この常光寺への道標が、現在境内に
残されています（②）。



②六阿弥陀道道標
延宝7年在銘

この道標の正面には「南無阿弥陀佛」
の刻銘があり、左側面には、「自是右
六阿弥陀道」の刻銘があります。この
左側面の刻銘では常光寺への方向が示
されています。

さらに右側面には「延宝七年巳未年
二月十五日 江戸新町本町 同行六十二」の刻銘がありま

す。延宝7年（1679）は年号が刻
まれている区内の道標では最も古いも
のです。

一方で右側面の刻銘にある「新材木
町」は現在の中央区日本橋堀留町を指
しています。この刻銘は、区域外の人々
によって道標が建てられたことを示し
ています。

（六阿弥陀信仰については本紙282
号「江東区域と寺町②〜亀戸」も参照
して下さい）

木下川薬師堂への道標

さて、ここまで紹介した道標は、区
内の寺社に関わる道標でしたが、区外
の寺社に関わる道標も残されていま
す。

現在、北十間川に架かる境橋の橋
台地（亀戸3丁目）には木下川薬師堂
（浄光寺・葛飾区東四つ木）へ至る道
を示す道標が残されています（③）。

道標の正面には「木下川／やくしみ
ち」の刻銘があり、左側面には、「あ
つまもり」右側面には「本石」道※
の刻銘がそれぞれあります。



③木下川やくしみち道標
宝暦11年在銘

木下川薬師堂は、天正19年（1591）
に徳川家康から寺領を与えられ、享保
5年（1720）以降、徳川將軍家の
鷹狩に際し、御膳所（將軍が食事をと
る所）として利用され、將軍家と深い
ゆかりを持ちました。

その一方で薬師堂は庶民の参詣・遊
興の地であり、病氣平癒に靈験を持つ
として信仰を集め、カキツバタの名所
でもありました。この木下川薬師道は、
一九世紀前半の書籍などから参詣に利
用されていたことがわかります。

道標は木下川薬師堂へ至る木下川薬
師道を示すだけではなく、左側面の「あ
つまもり」の刻銘は吾妻権現社（吾嬬
神社・墨田区立花1丁目）への方向を
示しています。他にも右側面にある「本
石」道」の刻銘からは、本石町（現
中央区日本橋本町）の人々により建立
されたことがわかります。

今回取り上げた2件の道標は、い
ずれも現在では区外の人たちが建立し
たものです。このことは江戸の人々の
寺社参詣に対する関心の深さが、形に
なったものと言えます。

こうした道標については、今後も紹
介していきたいと考えています。

※現在では読めなくなっており、拓
本資料で補完しました。

（文化財専門員 功刀俊宏）